

## 中学の

### 募集停止と再開

大正一五年の創立以来、岩手中学は「岩中」の名で市民に親しまれてきた。戦後の学制改革に際しては、新制中学として存続するとともに、新制岩手高校も併設され、その一貫教育は高く評価されるに至った。だが中学校が義務教育化したことと、ひところのベビーブームが過ぎ去ったことなどが重なり、岩手中学への志願者数は次第に減少の一途をたどっていく。

昭和四三年度には、定員を一举に二〇名に減らし、英語・数学・国語は中学三年時に高校課程に入るなど、徹底した英才教育に踏み切った。その結果、中三でありながら高一の学研実力テストで全国第三五位に食い込む生徒も出て、学業面では素晴らしい成果を挙げた。

しかし、中学への出願状況は、昭和四三年度

一四名（うち七名合格）、四四年度一二名（二名合格）、四五年度は八名の志願者に対して合格者なしという状態に立ち至った。そして昭和四五年十一月、ついに翌四六年度からは岩手中学の生徒募集を停止する断が下されたのであった。教職員や在校生はもちろんのこと、同窓生のあいだにも、「岩中」の名が消え、六年間の一貫教育体制が崩れるのを惜しむ声は高かったけれども、社会情勢の変化は如何ともしがたく、四六年度、四七年度、四八年度と中学の生徒募集は停止されたままだった。

そのようなさなかの昭和四八年七月、山中順三校長が病気のために退職し、教務主任の遠藤貫中が第五代の校長に就任した。

すでに述べたように、山中は昭和八年岩手中学校に赴任し、二九年一〇月に校長に就任した。四八年七月の勇退まで、じつに四〇年にわたって本校の歴史とともに歩んだ。とくに校長としての二〇年間は、質実剛健を旨とした楽しい学

校づくりに励み、教職員や生徒に大きな感化を与えた。

いっぽう、遠藤新校長は、旧制岩手中学の第一回卒業生である。東京商大（現一橋大学）を卒業、昭和二四年から母校の教壇に立ち、はじめ社会科学を、のちには英語を担当した。生徒から見れば大先輩に当たるわけである。創立以来約半世紀が経過し、ともすれば建学の趣旨に対する理解も薄れがちな時期に、草創期の石桜精神を身をもって体験した先輩を校長に迎えた意義はまことに大きかった。

「岩中」への愛着も人一倍強い遠藤校長が就任して間もなく、三田義一理事長から岩手中学校復活の指示があった。

「岩中は多くの卒業生を輩出している学校であり、ぜひ復活させたい。授業料は徴収しない。岩中・岩高と六年間の一貫教育が本校の精神である」という理事長の英断である。

この英断のもとに、四九年度から岩手中学の

生徒募集が再開され、同年度には一一名の入学者を迎え入れた。この喜びを、遠藤校長は『石桜』第七〇号の巻頭言で次のように書いている。

昭和四九年度は、未来に大きな可能性をもつ、若い岩手中学校の生徒を迎え、ほんとうに喜ば

しい。

元氣にとびまわっている生徒を見ると、春に大地から出てくる若芽を連想する。

池大雅は若木の下で笠をぬげと言った。

今は若木であるけれども、無限の可能性をうちにひそめている若者に、敬意を持って接せよと言う意味である。

わたし達はこの可能性を現実のものたらしめるため、きびしさとともに愛情をもって教育しなければならぬ。

この文に接するとき、我々はただちに鈴木卓苗初代校長を連想する。鈴木校長の学園主義とは、学校を植物園に、また生徒を植物の若芽にたとえ、若芽をのびのびと育て上げるのが園丁たる教職員の使命であるとする考え方であった。その薫陶を受けた遠藤校長が、恩師と非常によく似通った教育理念を持つに至ったことは興味深い。あるいはこのあたりに、私学の伝統がいつまでも受け継がれて滅びない秘密があるのかもしれない。